



## 【TOPICS】

- 2010 実践教育研究発表会 北海道大会開催報告特集
  - ・ 2010 実践教育研究発表会 北海道大会開催報告・・・1
  - ・ 機械系企画報告・・・3
  - ・ 電気・電子・情報系企画報告・・・7
  - ・ 建築・デザイン系企画報告・・・9
  - ・ 企業展示実施報告・・・12

## 【2010 実践教育研究発表会 北海道大会開催報告特集】

### 2010 実践教育研究発表会 北海道大会 発表会を終えて



北海道職業能力開発大学校校長  
大会会長 日野 光元

実践教育研究発表会を初めて北海道で開催し、期間中延べ 270 名もの会員の皆様に全国から参加して頂きました。各系の企画テーマを中心にして、会員が日頃取り組んでいる実践教育訓練に関する活動成果を、キーノート、ポスターも含め過去最高の 101 件発表して頂きました。

本大会テーマは未来に向けての「ものづくり・ひとづくり」でしたが、前旭山動物園長小菅正夫氏による「旭山動物園再生への挑戦」と題する特別講演はとても素晴らしいひとづくりのお話で、聴衆一同感慨に浸ることが出来ました。また、小樽が誇る民芸企業・北海道職人義塾大学校の皆様のご協力によるガラス工芸作りやオルゴール作りなどが体験できる「小樽でのモノづくり」工房、中央や地元企業の 120 名にも及ぶ皆様の協力による展示コーナーも大盛況でした。

一般の方々 40 名、学生 250 名、同時開催したキャリア教育フェスタ関係者 120 名も含めて、総参加者数が過去最多の 800 名にも及ぶ大会を無事大成功裏に終えることができたことを当大学校職員一同大変嬉しく思っております。皆様のご協力に対し、心から感謝申し上げます。

## 【2010 実践教育研究発表会 北海道大会開催報告特集】

### 2010 実践教育研究発表会 北海道大会 大会開催報告

2010 年度の実践教育研究発表会が 9 月 30 日から 10 月 2 日までの日程で、北海道小樽市の北海道職業能力開発大学校（以下北海道能開大という）で厚生労働省、雇用・能力開発機構、小樽市、小樽市商工会議所、小樽市銭函工業協同組合の後援で開催されました。今大会は「未来に向けての『ものづくり・ひとづくり』」を大会テーマに掲げ、大会運営委員会および実行委員会によりいろいろな企画が準備されました。今回は、北海道能開大で計画されたキャリア教育フェスタも同時に開催され、3 日間の会期中、延べ 800 名余りの参加者により発表や交流が行われました。

3 系共通企画である特別講演では、「旭山動物園 再生への挑戦」というテーマで旭山動物園前園長の小菅正夫氏の講演が行われました。

講演では、旭山動物園の再生前の状況、また再生に向けての小菅氏らの取り組みなどが熱っぽく語られ、講師の話し方のうまさもあり、思わず話に引き込まれ、時間を忘れてしまうほどでありました。講演から、物事に取り組む上での重要なヒントを得た気もしました。

各系の独自企画もそれぞれ行われました。機械系企画Ⅰでは「能開大卒業生と今後の学生教育」というテーマで北海道の企業方々（4 名）を招いてシンポジウムが行われました。シンポジウムでは、企業の方々から現在の企業状況や卒業生の状況、企業から卒業生に要望することなどが話されました。話の中には非常に厳しい内容もあり、北海道能開大の在校生も出席する中で真剣な議論が交わされました。

電気・電子・情報系の企画Ⅱでは、「電気・電子・情報系に求められる職業教育訓練の現状と課題」というテーマでシンポジウムが行われました。シンポジウムでは、川原宏昭氏（北海道経済部労働局人材育成課主幹）をはじめとする 6 名のパネリストから若年者の人材育成に関する取り組み事例などの発表があり、その後いろんな角度からの熱心な討論が行われました。

建築・デザイン系の企画Ⅰでは「北海道の住まいの変遷ー過去から未来へ」という演題で小林孝二氏の特別講演が行われました。講演では、どうして本州とは異なる建築文化が北海道で生まれたかなどについて詳しい説明がされました。

一般講演は 95 件（機械系 37 件（うちキーノートスピーチ 1 件）、電気・電子・情報系 27 件、建築・デザイン系 15 件、能力開発分科会 16 件）、ポスターセッションは 6 件（機械系 2 件、電気・電子・情報系 2 件、建築・デザイン系 2 件）の発表がありました。また今回は、北海道能開大の卒業生による発表が 5 件、能力開発分科会の中で行われました。

企業展示には全国から 28 社（中央企業 20 社、地域企業 7 社）の出展があり、教育・訓練の教材や関連製品などの展示が行われ、各企業のブースには多くの方々が参集していました。また、今回はブースごとに展示内容について説明する時間が設けられ、それぞれ PR がされました。

展示会場に設置されたものづくり工房（ガラス工芸づくり、オルゴールづくり）では、多くの参加者がものづくりを体験していました。

【2010 実践教育研究発表会 北海道大会開催報告特集】



一般講演



特別講演



展示会場、ものづくり工房

(北海道職業能力開発大学校 中田 英次)

機械系企画報告

機械系企画 I 「能開大卒業生と今後の学生教育」

パネリスト

(株)光合金製作所 代表取締役社長 井上 晃 氏

(株)コスモ設計 代表取締役 大和田 直司 氏

中山機械(株) 取締役総務部長 小瀬 弘志 氏

シンセメック(株) 代表取締役 松本 英二 氏

司会

中国職業能力開発大学校 教授 原 圭吾 氏



平成 22 年 9 月 30 日(木) 13:30~15:30、北海道職業能力開発大学校 B 会場 (A107 教室) において、機械系企画 I シンポジウムが開催されました。パネラー各氏から各企業について説明、「現在の能開大教育に足りないもの (カリキュラム、徳育、基礎学力等について)、卒業生や在学生への要望や期待すること、全国の能開大の先生方に対する注文やアドバイス」について、聴講者とパネラーとの間で活発な討議が行われました。(詳細は次刊発行の実践ジャーナル紙をご参照ください。)

このシンポジウムは、卒業生が働く企業の方々と実際に議論をして、教育訓練にどのようにフィードバックさせていくのかという目的で開催されました。論点として、現在の能開大教育に足りないもの (授業のカリキュラム、徳育、基礎学力等について) について論じ、次に卒業生・在学生の要望や期待することを聞き、三番目に全国の能開大の先生方に対する注文やアドバイスをいただきました。

能開大では実験・実習を重視した実践的なカリキュラムを取り入れ、少人数の教育訓練を、充実した実験・実習設備で行い、高い就職率になっています。このような能開大は、企業側から見て能開大の学生を採用したい、育てたいという観点から、能開大のカリキュラムや教育システムをどのようにするとよりよくなるのか、企業側から以下のようなご提案を受けました。



## 【2010 実践教育研究発表会 北海道大会開催報告特集】

- ① エンジニアで身を立て実践的にやるのであれば、世界に出て活躍できるような大胆さ・アグレッシブさというものを持ち合わせていくとよいです。
- ② 元気にアグレッシブルに仕事をさせていただきたいです。
- ③ 会社が社員に求めている最も重要なものは実績・成果をいかに早く作れるかの一点だと思います。
- ④ 精神力を強化するようなカリキュラムを組んでいただけるとありがたいです。
- ⑤ 学校では基礎教育が大切です。基礎教育を十分やっていくと応用がきき専門性につながると思います。能開大に求めるものは、基礎力を徹底的にたたき込んでほしいです。やっているようで忘れていきます。
- ⑥ 企業を理解して、どういう会社・職場で働くかをくみ取った実験・実習、学生との接し方・教え方が、専門性とかテクニックだけでなく、心を育てる教育をしていただけるとよいでしょう。
- ⑦ 先生方によく就職先の会社に行って働く人を見て理解してほしいです。会社にあった人材を求めています。学校の勉強に付随する他の部分で人間形成をする必要があります。一人一人の個性を活かしてほしいです。基礎は同じでしょうが一人一人違ってよいと思います。
- ⑧ 学生は「なぜか」を考えることが必要です。何で先生はそういう風に言うのかを考えて、おかしかったら「先生、何でそういう風に言うんですか？」と常に聞いていきましょう。
- ⑨ 大学では 60 点以上で合格ですが、企業では 100 点満点でなければならないんです。99 点ならお客さんがお金を払ってくれないんです。常に緊張感を持ち、社会にすぐ出ていくので、より多く社会と接点を持つということがよいと思います。
- ⑩ 英語をもっときちんとやらなければダメです。英語はどこへいっても通用するのです。

次に学生から見て、能開大で受けている教育について、良い点と悪い点とを発言していただきました。

### よい点：

機械にたくさん触れることができ楽しい授業を受けています。

他の大学とは違い機械に触れる時間が多く、ものづくりの喜びがわかることです。

自分で考えて図面を描いたら、すぐに工作機械でものをつくることができ、確認できる場所です。

### 悪い点：

先生方によって加工の仕方など、教え方が違います。

疑問な点は、教える先生によって、同じ問題でも返ってくる答えが違い、どれが正しいのか困るということです。

パネリストからの回答及び感想

最終成果品をつくるために、到達する方法手段は無限にあるので先生によって教え方が違うのは当然です。問題は、考える力をもっと伸ばすこと、自分の価値観で判断を行うことです。

ものをつくる、考えていくプロセスは、100 人いれば 100 通りの考え方があります。それぞれの先生が違ったプロセスを皆さんに教えているのです。どれを選択するかを選ぶ訓練をしてください。



## 【2010 実践教育研究発表会 北海道大会開催報告特集】

教え方が違うのはあたりまえです。違わない方がおかしいと思います。日本では同じであたりまえという先入観があります。学校では正解があり答えは1つだと教えているかもしれませんが、企業で働くと絶対に正解というのはありません。一番いいだろうという手段を選ぶことになります。学生のうちに答えをだすことはお勧めしません。正解というのは常に変わっていくし答えも1つじゃないと思った方が気持ちも楽になります。

最後に、ものづくり教育において、教育をしている先生の悩みに対するパネリストの回答

人間が伸びるのは会社に入ったからでも重要な仕事を任せたからでもなく、伸びるのは後輩ができ指導しなければならないと悩むとき、結婚したとき、子供ができたときです。タイミングよくアドバイスをだすことが大事だと思っています。

精神力強化は我が社でも悩んでいるところです。入社したときから3ヶ月間、徹底的な精神強化のための研修を行っております。

テストは序列をつくるために行います。記憶力で左右されるテスト結果だけではなく、努力など隠れたものを評価したいと思っています。

追い詰められてプレッシャーに負けるとおかしくなることがあります。そこで開き直ることができないと身体がもちません。できることは徹底的に全てやり最後はお客さんに下駄を預けるとわかっていただけます。

(本記事は、シンポジウムのエッセンスを記載しています。全文を読みたい方は近刊予定の実践ジャーナル 12月号をお読みください)

### 機械系企画Ⅱ 講演「小樽でのモノづくり」

#### 講演者

(株) 深川硝子工芸 代表取締役 出口 新一郎 氏 <http://www.fukagawaglass.co.jp/>  
オルゴール海鳴楼 代表取締役 塚原 ふさ子 氏 <http://www.kaimeiro.com/>

#### 司会

北海道職業能力開発大学校 教授 中田 英次 氏

平成22年9月30日(木) 16:00~16:50、北海道職業能力開発大学校 B会場 (A107教室) において、小樽で代表的な工芸であるガラスづくりを行い、職人さんの育成にも力を注いでいる深川硝子工芸の出口氏(木訥とした話しぶりがいい感じでした)、またオルゴールのピン打ち機を製造し、独自のオルゴールづくりしている



## 【2010 実践教育研究発表会 北海道大会開催報告特集】

海鳴楼の塚原氏（元気澁刺の話しぶりが小気味いい感じでした）を講師に迎え、その技術や技能、またそれぞれモノづくりにかける思いを語っていただきましたので、以下に報告いたします。

小樽ガラスの代表とも言える深川硝子工芸さんのルーツはその名の深川からわかるように東京の深川にありました。1906年に東京都深川区（東京府東京市の区、今の江東区ごく西部）で創業し、薬瓶やラムネ瓶を作っていたそうです。ラムネ瓶のB玉は王冠がなかったから必要だったとか、中に炭酸をいれるとその圧力で入口を塞いで蓋になるのですが、蓋には真円度が高くないと空気や液漏れが発生してしまうそうです。ラムネ瓶に入っているのがA玉で、使えないのがB玉というらしいとかのお話も聞くことができました。

業務用ガラス食器やファミレスの食器の製造も行っていたらしいのですが、プラスチック容器が大量生産で食器の製造数は年々減っていったそうです。さらに環境の変化で東京はマンション開発等で移転を余儀なくされてしまったのです。その結果2003年12月に小樽に引っ越し社名を(株)深川硝子工芸として再出発されたのです。

何故小樽だったのか？小樽でよかったのか・・・

東京の夏は、工場内の温度が60℃以上で、冷房をしても意味がなかったのが小樽では窓を開けておくだけで快適に作業ができるようになったり、炉には天然ガスを利用できるとか小樽は想像していた以上にガラス工芸に向いている省エネな場所だったのです。



さらに、ガラス職人が東京から付いてこなかったら、廃業するしかないと思って小樽に来たそうです。東京で求人票を出しても全然こなかったのが、こちらでは若いたくさん来て、定着率も高く、遊ぶところが少ないので一生懸命ガラス作りをしてくれるという、いいことづくめだったのです。

北一硝子はもともと石油ランプの製造を行い、明治から昭和初期のニシン漁が盛んだった頃は浮玉（ブイ）の製造も手がけていたそうです。

小樽運河地区の再開発に伴い開設した観光客向けの照明器具やガラス製品の製造・開発をしており、そちらへ小樽切り子などの商品を卸しているとのことでした。

北一硝子はもともと石油ランプの製造を行い、明治から昭和初期のニシン漁が盛んだった頃は浮玉（ブイ）の製造も手がけていたそうです。小樽運河地区の再開発に伴い開設した観光客向けの照明器具やガラス製品の製造・開発をしており、そちらへ小樽切り子などの商品を卸しているとのことでした。

オルゴール海鳴楼の代表取締役塚原ふさ子氏はその起業からの現在に至るまで、日本でのオルゴールの歴史とその技術を興味深くお話しいただきました。

塚原氏のご出身は小樽ではなく山形県だそうです。松下電器産業(株)東京支社退社後、1981年に夫の実家の小樽に来られ、ガラス製品販売店に勤務したそうです。ここでも深川ガラスの出口社長とも縁があるわけです。



【2010 実践教育研究発表会 北海道大会開催報告特集】

ね。その後、小樽運河の埋め立てがなくなり、小樽の再開発でオルゴールに目をつけられたそうです。そのきっかけはご主人からのプレゼントらしい・・・。

日本のオルゴールの歴史は、スイスのリュージュ社からは日本の三協、そして今は海鳴楼でのオリジナルオルゴールの制作を手がけられるメーカーとなったそうです。オルゴールの構造も詳しく説明されました。今では安い中国製品が多くなってしまっているようですが、オルゴールに大切な音感が少し狂った音痴なものもあるので、オルゴールでもっと大切なのでそれを聴き取る耳であるとのことでした。ペーパーラウンド型オルゴールも実際にならしていただき、オルゴールの奥深さを聴衆の皆さんに熱く語っていただきました。



(雇用・能力開発機構群馬センター 機械系 有田 浩之)

電気・電子・情報系企画報告

電気・電子・情報系企画 I 実装技術研究分科会セッション報告

実践教育研究発表会における実装技術研究分科会セッションが定着してきました。今年度は、能力開発施設において、実装関連技術のさらなる充実に向けてどのようにしていけばよいかをテーマに開催いたしました。以下に、実施した内容の概要を報告します。

【第一部】 技術講演 EMC設計のためのスキルとアプリケーションの必要性について

講師 (株)図研 営業本部EMCエンジニア 濱田 麻衣子 氏

電子機器は、現在さまざまな電磁ノイズにさらされています。しかし、ノイズは非常に複雑な経路を通過して他の機器に到達しているためEMC問題を複雑にしています。それらを解決するために必要なスキルと支援ツールの有効性について具体的事例を交えて講演していただきました。

【第二部】 現状報告と討論

(パネリスト)	関東職業能力開発大学校	陣内 望
	東北職業能力開発大学校	中澤 直樹
	株式会社 図研	濱田 麻衣子
(進行)	北陸職業能力開発大学校	滝本 貢悦

電子系のものづくりで欠かすことの出来ない実装技術分野について、各能力開発施設において、具体的にどのように教育訓練されているかを報告していただき、さらに充実させるための方法等について、参加者を交え討論いたしました。



【2010 実践教育研究発表会 北海道大会開催報告特集】



(北陸職業能力開発大学校 滝本 貞悦)

電気・電子・情報系企画Ⅱ シンポジウム報告

『電気・電子・情報系に求められる職業教育訓練の現状と課題』

このシンポジウムでは、本系に求められる職業教育訓練の現状と課題、とくに新規学校卒業者を含めた若年者の人材育成に関する現状と課題について考えた。パネリストと司会は以下の通りである。各パネリストから人材育成の現状と課題が報告され、活発な討議がなされた。

【パネリスト】

- |                                  |         |
|----------------------------------|---------|
| ・アイフォーコムグループ 代表 CEO              | 加川 広志氏  |
| ・北海道庁 北海道経済部労働局人材育成課 研究開発グループ 主幹 | 川原 宏昭氏  |
| ・北海道障害者職業能力開発校 プログラム設計科 職業訓練専門員  | 浅理 邦春氏  |
| ・北海道立旭川高等技術専門学院 電子工学科 職業訓練専門員    | 高瀬屋 京子氏 |
| ・北海道職業能力開発大学校 電気・電子系 講師          | 斉藤 晃一氏  |
| ・青森センター 電気・電子系 講師                | 齊藤 学氏   |

【司会】

- |                             |        |
|-----------------------------|--------|
| ・神奈川センター 電気・電子系 教授          | 菊池 清明氏 |
| ・山形県立産業技術短期大学校 情報制御システム科 教授 | 千秋 広幸氏 |

(職業能力開発総合大学校 中谷 努)

【2010 実践教育研究発表会 北海道大会開催報告特集】

建築・デザイン系企画報告

建築・デザイン系企画 I

特別講演：『北海道の住まいの変遷 一過去から未来へ』報告

当日は、田畑先生に司会をお願いしました。また、北海道能開大の建築系学生たちの参加もいただき、たいへん盛況の中で進められました。ご講義の内容は、①北海道の住まいの特徴は、近世以前から道南地方の一部に定着していた建築文化を含めて、本州以南からもたらされた建築文化による影響が大きかった点であること。②特に、近代以降、開拓が内陸部へと進展する中で、移住者が郷里から持ち込んだ建築様式には、基本的に入植地の気候風土条件に適合しないものが多かった。北海道における住宅改良、居住条件改善の歩みは、このような防寒性を欠いた「欠陥住宅」と向き合うことから始まったといえる。多様な条件の下で、結果的に大きな役割を果たしたのが、開拓使による洋風建築技術の導入と行政による普及指導であった。洋風デザイン・技術の普遍的な広がりには、漁村のニシン番屋における上げ下げ窓や洋風デザインの採用（旧花田家・小平町、旧田中家・小樽市など）、農村の茅葺農家における上げ下げ窓の採用（旧泉家・栗山町）などに今日も見ることが出来る。③戦後の住宅改良もまた官主導の形で展開する。戦後の住宅政策の目的の一つは戦災者受け入れであり新たな開拓移民対策でもあった。このような背景の中で、先に述べた明治期以来の洋風建築技術の定着過程をたどるように、寒地向の防寒住宅が研究され一般に普及する。④住文化の面では、ストーブを囲んだ団らんの場の喪失、寒さを利用した貯蔵場所の消失。屋外環境では、北海道における住宅地の特徴といわれてきた比較的ゆとりのある敷地と塀や門構えを飾らない開放的な配置などが、宅地開発の進展の中で失われつつあり、夏場の景観では北海道外と見分けのつかない住宅団地も多くなってきている。⑤北海道の住まいは 100 年あまりの短期間に劇的な変化を遂げたが、その過程で失ってきたものもまた多かったのではないかと考えている。等の論点でご講演いただきました。

この講演内容は、ジャーナル誌にて特集する予定であります。

(東北職業能力開発大学校 星野 政博)

■司会：北海道職業能力開発大学校・建築科 田畑 雅幸氏

■企画：(社)実践教育訓練研究協会／建築・デザイン系専門部会



写真 1 ご講演する小林孝二先生



写真 2 学生を含む聴講の方々



## 【2010 実践教育研究発表会 北海道大会開催報告特集】

### 建築・デザイン系企画特別企画

#### 討論会『建築・デザイン系活動の22年をふりかえって』報告

1日目の9月30日(木)、系特別講演の後、16:00~17:30、上記討論会を全員参加形式で開催した。

実践研「建築・デザイン系専門部会」は、1988(昭和63)年9月、「第1回実践教育/建築・デザイン系研究発表会」を北九州短大にて開催し、翌1989(平成元年)、有志により「実践教育/建築・デザイン系研究会」を設立したことに始まる。以来22年間にわたって活動して来たが、20年の区切りを経た時点で一定の総括を行い、新たな時代にむけて活動を展望すべき時点に来ており、次号(2011年9月号)『実践教育ジャーナル』に、総特集『今後に向けての総括と展望(仮題)』を予定していることから、その企画の一端として開催したものである。

当日参加者は約16~17名と少数であったが、全員が自由に発言しやすいようにテーブルを円卓式に並べ、企画趣旨説明:秋山恒夫(系常任幹事、職業大東京校)、司会:磯野重浩(系事務局長、九州能開大)、星野政博(理事、東北能開大)の各氏による進行形式で行った。

最初に、企画担当の秋山から、22年間の活動年譜や、これまでの活動の問題点と改革課題に関するメモ資料の説明を行ったあと、参加者全員が順に、これまでの活動をふりかえって今後への意見や提案

を簡単に述べてもらう方法で行った。発足時から参加している会員や途中から参加した会員など、各立場から率直な意見や提案があり、時間不足ではあったが、実りある討論が出来た。

今後、次号ジャーナル発行にむけて、編集委員だけでなく系役員の実任において、充実した特集構成をめざして取り組むことを確認した。



(職業能力開発総合大学校東京校 秋山 恒夫)

### 建築・デザイン系企画特別企画 エクスカーション1

#### 『北海道・小樽の建築と開拓の足跡を訪ねて』報告

実践教育研究発表会にあわせ、開催地の先生方の企画によるエクスカーションが多くの参加者を集め実施されました。

エクスカーションAコースとしては、小樽市内の歴史的な建造物を巡るものです。訪問した建物は、



## 【2010 実践教育研究発表会 北海道大会開催報告特集】

高台に建つ「和光荘」(大正 11 年)(木造 3 階建て一部鉄筋コンクリートの洋館)のほか、田上義也記念館(坂牛邸)(昭和 2 年)(昭和初期の北海道を代表する建築家・田上義也の記念館)、小樽市公会堂・能楽堂、カトリック富岡教会などの見学を通し、小樽市内の歴史ある建築物に間近に触れることができました。



写真 1 小樽市能楽堂・能舞台にて

また B コースとしては、北海道開拓の歴史と建物を見ることができる「北海道開拓の村」と江別市セラミックアートセンターを見学しました。北海道開拓の村では、広大な敷地の中に、開拓の過程における生活と産業・経済・文化の歴史を示す道内の建造物などを移設・復元し、開拓当時の情景も再現展示してあります。また、前日に系の特別企画『北海道の住まいの変遷 — 過去から未来へ—』で講演いただいた小林孝二氏(北海道開拓記念館 学芸部長)にもご説明いただきながら、あらためて北海道の開拓の歴史を学ぶことができました。

(北海道職業能力開発大学校 田畑 雅幸・九州職業能力開発大学校 磯野 重浩)

### 建築・デザイン系企画特別企画 エクスカーション C コース 『北海道に残る古民家再生現場を訪ねて』報告

エクスカーション C コースは、岩見沢市のとなりまちである三笠市で古民家再生のお仕事でご活躍中の武部建設さんを見学させていただきました。

小樽から高速道路で約 45 分。本社の敷地には、たくさんの民家の古材が積み上げられているのが印象的です。なぜ北海道で古民家再生なのかという疑問もあり武部豊樹社長に伺いました。北海道は、屯田兵で知られる明治の頃から、移民の人たちによる開拓も多く行われ、その方々の出身地の構法で住宅が建てられてきているケースが少なくないとのこと。その建物の建替えの時期にいくつも遭遇する中、伝統的に受け継がれた人々の暮らしに学び、子供たちの豊かなところを育みたいとの思いから、古民家再生をはじめられたとお聴きします。敷地には、福井県出身の方であろう民家の骨組みが残っていました。(写真 1.) 敷地内にはゲストハウスとして古民家を再生させた建物(写真 2)があり、さすがに気密・断熱はしっかりできていて Q 値は 1.0 前後、真冬でも屋根面の太陽光パネル程度の電気量で暖房がまかなえる性能とのこと。他にも H20 年度長期優良住宅先導的モデル事業、北の民家モデル構築と普及推進事業などを展開されており、人材育成では大工育成塾での受入れを北海道では唯一、取り組まれています。最後に、このような地域で活躍されている武部建設さんにエールを贈るとともに、益々のご発展を祈念しまして報告に変えさせていただきます。

【2010 実践教育研究発表会 北海道大会開催報告特集】



写真 1 福井県出身開拓民家仮組



写真 2 古民家再生



写真 3 武部社長との懇親会

(近畿職業能力開発大学校 田島 幹夫)

## 企業展示報告

2010年9月30日(木)～10月2日(土)の3日間の発表会会期中の2日間で企業展示を実施しました。例年は会期の初日、二日目での実施でしたが、今回は実施施設の都合もあり二日目・三日目での実施となりました。

出展企業募集は北海道開催と言うこともあり、例年出展いただく関東近傍の企業からは出展辞退も多く、募集活動は難航したものの、賛助会員を中心とする後援企業様のご協力により結果的には27社29ブース(内地元7ブース+α)での開催が出来ました。

今回、初の試みとして各企業の出展内容説明会(各社3分程度)を開催しました。説明会には見学者が多く集まり展示会場は賑わいを見せ、出展企業からも好評でした。説明会実施は企業数が増えた場合は実施方法の検討も必要ですが、次年度以降もこの企画は継続予定です。

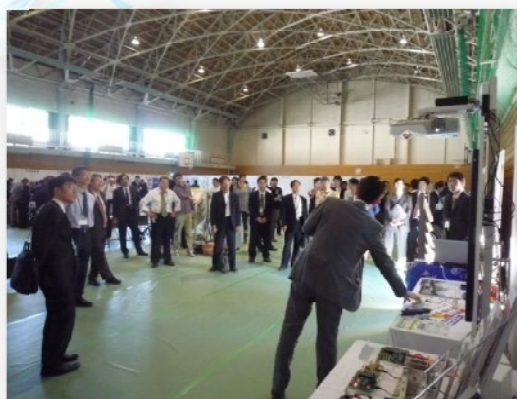


写真 企業展示の様子

(職業能力開発総合大学校東京校 太田 和良)

## 編集後記

今回は2010年秋号として、今年度開催された2010実践教育研究発表会 北海道大会の報告特集を掲載致しました。今年度の発表会も大盛況に終えることができました。関係の皆様お疲れ様でした。来年度は千葉職業能力開発短期大学校での開催を予定しております。次号は、当協会会長の新年の挨拶や新理事の紹介を予定しております。

WEBニュース編集事務局では、皆様からの各地のポリテクビジョンや催し物に関する情報をお待ちしております。記事半ページ程度、写真2枚程度を添付していただき、以下のメールアドレスへ直接、もしくは編集事務局まで封書でお送りください。またこちらからも記事のお願いをするかもしれませんが、そのときにはご協力くださいますようお願いいたします。

例年、この時期になりますと、異動した方もいると思います。勤務先、メールアドレスの変更は、分かり次第、実践教育訓練協会事務局までメールまたはFAXにてお知らせください。



発行責任者：大竹 勉

発行：(社)実践教育訓練研究協会事務局

〒185-0021 東京都国分寺市南町 2-18-36-203

TEL 042-300-1651 FAX 042-300-1652

<http://www.jissen.or.jp/> E-mail: [jissen@jissen.or.jp](mailto:jissen@jissen.or.jp)

編集責任者：中谷 努

編集事務局：職業能力開発総合大学校

〒252-5196 神奈川県相模原市緑区橋本台 4-1-1

TEL・FAX 042-763-9163

<http://www.jissen.or.jp/> E-mail: [jissen@jissen.or.jp](mailto:jissen@jissen.or.jp)

広報委員会 Web Jissen News 編集部門：田中義弘・中谷努・御田村真毅

広報委員会 Home Page 編集部門：小玉博史・新島泰宏・有田浩之・永野秀浩

広報委員会 委員長：有田浩之

発行・編集：(社)実践教育訓練研究協会 広報委員会

JISSEN NEWS 2010 秋(No.169)